

# きぶるのたね

NO.31  
月刊

第三編 寺院誌 第五号

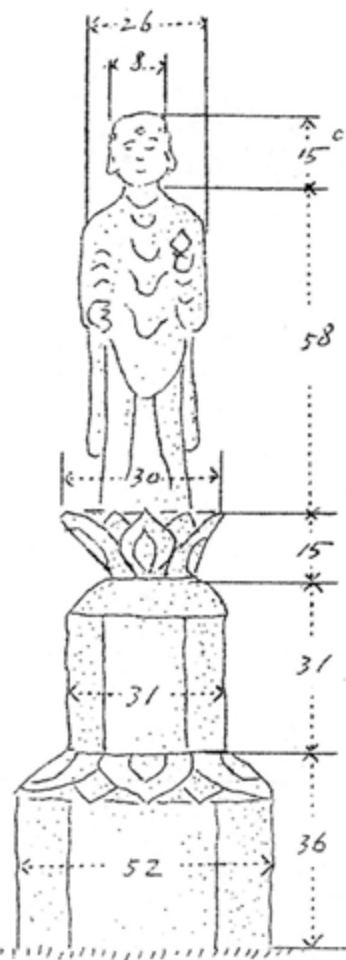
昭和三十六年一月一日発行 (非売品)  
発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬七ノ字垣方

吉備観老協会

## ○清水山松林寺 (その二)

### △石地藏尊

門前の入口にある。もと山門を入つた左側に一八二種四面の地藏堂に安置していたが、昭和九年の地震で建物も倒壊したので、石地藏尊のみ露坐してここに移した。其後信仰者が澤野を集めて假屋根を繕つて信仰の者も多く常に香煙が絶えな



石佛の楹造は八十二種の三三にわかれた台石の上に七十は六角にして上部六蓮瓣の下向座を有し東面に寄進者の名前があるが、地下に埋まり字兵衛の刻字のみがみえる。二段は同じく六角形にして上部は円く盛り上げ、裏面に「正徳五、丙午十月廿四日念佛講中」と刻んでゐる。三段は六蓮瓣空にして上向きになつてゐる。刻文によつて正徳五年(一七一五)の創造であることが窺はれる。手前に水鉢石がある。その台石は二七三種角にして高さ二十五種あり、横面に「幻化空身童子」「享保十五年戌八月廿四日」の文字が刻んである。これは正徳五年から十六年間の幻鬼の墓石でこの地藏尊とはなりの関係もなく他からここに運んで水鉢石の台石に利用したものである。

## △山門

本瓦葺屋根にして梁間三ニの種、桁行四一ニ種、四脚門にして正面に軒破風を配し「清水山」の扁額をみだげらる。これは十世麓山禪師の筆である。建築は諸建物中最も古く創建当時の姿を想像せらる。もと西向にして濠池端の道路から直線に入つたが、後々に至つて西向を忌みて現位置に移し南向にしたという。山門の傍に「不許葦酒入山門」「安永六、丁酉至日辟命建焉」と刻した十八種角、地上高さ一五五種、石標が建つてゐる。これは十三世安岩禪師の時代(一七七七)の冬至の日に朝廷の命によつて建てられたものである。許さざるに葦酒山門に入る、と読むべきか。禪宗は宗義として酒飲みを最も戒律してゐるのである。

## △本堂

本堂は間口一四五種、奥行一六一種、入母屋造、單層本瓦葺屋根にして西に連接して葺裏がある。周圍に板廊下を繞らし、内部は正面に一八二種中の四畳敷の廊下があつて六ツの間に分かれてゐる。中央の陣には本尊延命地藏菩薩の立像を安置し右には開祖別筆内光國師、左には禪宗の開祖達磨大師の坐像を奉安してゐる。右の室はもと藩主の居間にして東に清楚な庭園を控へてゐる。居間には「松樹千年翠、正四位校倉勝弘書」とした額をみだげらる。これは庭殿藩最後の藩主である。

## △

位牌堂には栗坂定林寺開祖の祖として赤松氏累代の法譜を列記した板碑を安置してゐる。  
成願寺性存信尊上座前成願寺 延徳三、癸卯年六月三日寂赤松時勝(幼名)嘉吉九歳也從母遠江州再母嫁小倉某因為時宗僧改則中興後居置塩山城

一心院殿松奇長入大居士 前常陸介播備作守護 享德四年五月十三日卒 行年不詳 摂津再山城主赤松

法雲寺殿月潭内心大居士 前正四位下播備作播因但六州守護 觀應元年正月十二日卒播州赤穂郡白旗城主赤松次郎左工内則村行年七十二歳

天竺林寺月天妙善律師 前播州守護應安四年十一月廿九日播州菅繩城主赤松則祐權律師則村三男行年六十一歳寄附水田百五十反干定林

大性寺殿性通因規大居士 前伊豫守嘉吉元醉年九月十日卒播州根西郡城山城主赤松六郎義雅 赤松義則第四男嘉吉乱於城山城自殺

松泉院殿無等性雲大禪定門 前播備作守護明應五年四月廿五日卒(四十才) 赤松政則時勝長男也長禄二年八月廿日贈曾伯父滿祐罪後備作應仁元年五月十八日再嘗姫路城

板倉家御靈屋 板倉家の南東に間口三三三種、奥行四二四種のお蔵造の御靈屋と云の南に列んで坐す。御靈屋には旧庭榎藩主板倉家累代の靈牌を安置してゐる。

持月院殿前尚食奉御劔峯源光大居士 寛永十五年正月朔日 (童昌)

高徳院殿前尚食奉御義雲源忠大居士 寛文十三年五月廿五日 (童短)

惠林院殿前伯州大守空山源長大居士 神祇 元禄十丁丑年十月十七日 (童良)

当山岡基浄菴院殿徳巖源芳大居士 正徳三年二月十日逝去 元禄十五年岡創清水山寺為薦福道場也前越中大守板倉重高公

永曹院殿前因州大守鶴山源夢大居士 享保十五年七月三日 永舟院殿前摂州大守鶴峯源龜大居士 神祇 寛政八丙辰年五月十六日卒 享保九年五月廿五日卒

明德院殿幻化智光大童子 (墓碑には七月廿七日とあり 昌信の嫡子豊之助) 春彩院霞山幻霧大童子 宝曆三年正月廿五日卒

光永院殿前上林令一山源珪大居士 神祇 天明五年正月五日 (勝奥の長男勝志) 安永二年十月廿三日 (勝奥の三男勝紀)

霽顔院殿英貌源容大居士 靈 慶長四年境内に墳墓あり) 心月院殿前織染巫師天源喜大居士 神祇 天保十三年二月十七日 (勝喜)

永崇院殿前上林丞南山源昇大居士 (逝去年月日なし、系譜に文化元年十二月八日卒とあり) 勝氏) 明常院殿前越中大守義山源礼大居士 安政五年八月廿二日 (勝全)

同徳院殿仁翁良運大居士 明治元年十月初六日卒再六十五 板倉右近勝豊(勝喜の五男境内に墳墓あり) 弘化二年六月十七日去(廿四) 勝敬)

崇雲院殿洞巖源龍大居士 尊靈 嘉永元年八月七日 (勝成)

天徳院殿峯山源照大居士 天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

天保十三年八月七日 (勝成)

德應院殿前京兆少尹親恩源麟大居士嘉永元年八月十七日 (勝資)  
茅俊院殿前摂州大守山深運大居士嘉永二年三月十六日 (勝貞)  
幼老院殿萩親玉露大童子 慶應四年八月廿四日

桂華院殿玉老女童女 明治三年八月廿四日 (勝全の子か、境内に墳墓あり)  
智明院殿霞室貞壽大姉明治九年八月十三日 (勝全の子か、境内に墳墓あり)  
德巖院殿勝山源弘大居士等儀明治四十二年五月七日薨去 (勝弘)  
清妙院殿梅溪照薫大姉 尊儀明治四十四年二月七日薨去 (勝弘の室)  
盛徳院殿大法玄穉大居士 文久二年二月初八日卒四十五才没川猿  
と進勝虎(勝喜子の子に没り姓を日守、境内に墳墓あり)

盛久院殿桂林惠昌大姉淑靈 享保八卯十一月四日 (室良の室)  
(榮九郎 叔倉家系譜参照)

△ 御影太神宮

本殿は本造建にレテ流造、屋根は檜皮葺、高棚付にレテ棟の両端に板倉家の定紋左廻り巴三ツ頭を配してゐる。正面には「最上殿 正二位神道長上 卜部兼義」とした板額が懸げられてゐる。両脇に石燈籠を配し、外側は花崗石の瑞籬を繕つてゐる。  
拝殿は八八種に五五五種、前に板廊下を附け三室にわかれてゐる。これに二七二種に八八種の内拝をつけ、又二七二種に四五五種の幣殿を有する本造日本建本瓦葺屋根の入母屋造りである。  
向拝の前面には「太神宮」とした板額と幣殿には「太神宮 文正十年歲在辛酉五月中浣 大養 敬謹題」の紙表装の横額が及びけられてゐる。又安置する宝鏡は直径三〇種にして表面には松と鶴亀の模様を配し「天下

一 岩井丹波守正保」の鐫刻がある。この宝鏡は天保十五歲甲辰三月吉日撫川の吉見屋善吉が寄進したことが裏書してある。

この太神宮の由来を尋ねると後醍醐天皇の元徳二年(一三三〇)の頃、臨濟宗東福寺の法孫別當國師が七日間伊勢大廟に参籠し、天照大御神の分霊を勧請して栗坂村(在村)に開基した当山の前身、少融山定林寺に鎮守として尊崇したのが始まりであるという。当時別當國師は伊勢大廟の神官松垣大長官貞昌から一幅の畫像を賜はり、神勅によつて龍の贊を自ら書いた

日本秘密大日尊 大日輪觀音 觀音應化日天子  
日天垂迹名日神 此界能救大悲心 處力示現觀音  
これを一ニ種はりの板に張りつけ現に御神影として神殿に奉安してある。祭神は天照大御神であるが併せて佛敎の渡來してから本地垂迹の説によつて佛道では御影太日尊とあめ奉るのである。

別當國師は又別に藕絲の袈裟を賜はつた。これは現在京都の恩賜博物館に保存せられてあるという。藕絲とは蓮から引き出した糸によつて布織にされたものをいうのである。

当寺に五粒角にレテ長さ四五粒の印璽を傳へてゐる。これは不淨除けの印璽といはれ、伊勢大廟に参詣するには忌、不淨のものは避けなければならぬ事故が起るのであるが、この印璽を受けて参拝すれば諸願が満たされること傳へられてゐる。

この鎮守は應仁の乱後定林寺の衰頽とともに永く荒廢に歸してゐたが元禄十五年に板倉中守重高の寄進によつて造営せられたのである。此以後十三年毎に開座し一般参詣者に拝觀が許され、當日は五反幟が社前に建てられ黒住敎からは神官が出張して盛大な祭典が執行せられて

きたが今では全く瘡さ北たことはずでに祭典篇で詳しく述べた。

この五反熾というは四五五米の長さに「奉闕在御影太日尊」の八字が昔  
いてある。これは寛政の頃、当山十世麓山禪師の舎兄にあたる遷山先生  
が滞在中に書いたもので雄渾な筆跡は有名である。

当宮は今村宮 白鬘宮 吉備津宮 (備中) 吉備津宮 (備前) とともに五  
社宮と稱へられ近御から巡拜するものが多い。しかし当今は神北になつ  
た。これを俗に五社参りという。黒住教々書文政二年十二月の條に

「黒住宗忠が彌信心相續し難有事、段々出来候中にもこの節は朝七時一  
午前四時今五時の間、曉とて」頃よりおき、水をあひ、今村中仙道へ参り帰り候に  
抜式百計り執行仕ると夜明相成候先日も心に思ふやう此勢以候はば五社

参り相成候と奉存候、七時の鐘を聞き夫より起き夫より水など浴び、そらく  
身振致し先一番に今村へ参詣いたし、夫より仲仙道へ参り、其ま、一宮(備前  
の吉備津参神社)へ参詣得共、由々夜明不中又宮内(備中吉備津神社)へ参り、夫より

在殿へ廻り、六神宮へ参詣仕候へ共、中々に夜も明不中、夫より直ちに罷り帰  
り候へ、や々夜明不中、抜式百計りも執行仕候へば、やうく夜明に相成候我  
身存がら今に不しぎにぞんじ奉候、何分半時迄はかかり不申、毎度五社参候

得は、一日懸候處、半時程には参り帰り候し、か悪く申せば何と申すも相  
知れ不申、万事夫々順じ甚だ勢いよる敷、難在御事に御座候し。

とあり、文政二年(六九)の冬十二月、嘗て日に黒住教祖宗忠卿がこの御  
影太神宮に参拜せられ、つたことなき知る資料である。云ふまでもなく天  
照大神(あまてらすおみかみ)を尊く崇信せられたことと疑はれると共に、こ

の大神宮が如何に尊嚴な由緒深い宮であるかを知るものである。  
宗忠卿は其後も参拜になつたおあり、天保六年(一八三五)は毎年(三十三日  
の間は毎日参詣を饒されなかつたという。

### 宗忠卿について少レ書てみまう。

卿は黒住教の教祖にレて宗忠神社の祭神である。安永九年十一月廿六日  
御津郡今村(園市)の今村宮の禰宣を奉仕してつた宗繁の三男として生れ  
た。母は長瀬氏である。卿は幼名を右京治、後ち左京に改めた。生來正  
直にレて、幼い頃外出の時、天候が定まらず父は雨下駄を、母は雪駄を履  
いて行くようにいはれた。卿は雨親の命に従ひ雨下駄と雪駄を片づらぶつ  
履いて家を去つたという。万事このごとく父母に仕へて孝養をつくれ、常に  
父母の長身を神に祈つた。長兄は他家を結ぎ、次兄は江戸に遊学し、卿は独  
り父の神職を補けて、往々に奉仕し、神道を究明し、自ら身心の修養に努めた。偶文化九年の秋、父の  
の衰に遭ひ思慕の情に堪えず、ついに脚を患ひ翌年十月から病に罹り、ついに  
以結ぶ。この病は神から賜はつたものであり、この心は神の心である。と語り、これから毎日日光を浴び、陽氣を吸ひ、心  
身を靈活し、次第に病は快方に向ひ、益々信仰の道に進んだ。卿の曰く「天地は同体、神人は一。左も右も天  
地の化育に参じ、神人の至徳を全うする。皆自ら道あり道を貫くに誠を以てす。誠を以て道なし、  
日月照臨し萬物成す。目下、此天地の誠なり、誠の本体は神にレて受けて人に傳ふ。人何ぞ誠なら  
ざるべけんや」と、七箇條の訓誡を定めて自らその端を示し、三十六年の久しい間、神道を説き  
教えを垂れたのである。その教上日に從ひ、その門に入らざる者も甚だ多かつた。偶嘉永三年二月廿五日、天は  
新を卿に降し、病に七年七十一才で身まかりした。七年後の安政三年三月八日、勅許によつて宗忠大明神の神  
子を賜はり、文久二年二月廿五日には京都郊外の神樂岡に奉祀せられ、慶應元年十二月三日には特に勅額  
所に定められ、翌年二月七日、從四位下の神階を宣下されたのである。

### △ 奉獻の石燈籠の銘

- 一、山門を這入つた参道の両側 一對
- 右側 現任持願 麓山代 近享二兩庚辰九月廿有六日 永代常夜燈
- 左側 現任日技班代 室曆十庚辰三月朔日 永代常夜燈
- 二、同上

右側 奉獻 平野村 直次郎 観音堂 定次 彌吉  
 蛭瀬町 福岡屋幸右衛門 (姓高橋、幸向に住、子孫は東京に当主) (註)

左側 蛭山代 宮内親主 岡田屋熊次郎  
 天保十五辰三月 観音堂 水野邑 西平野邑  
 蛭山代 在詔人 観音堂 定次 同 彌吉 平野邑 直次郎

三、 神殿の玉垣の外、西側 蛭山代 一対  
 天保十五辰二月 蛭山代 田丸屋吉右衛門 川入屋 傳吉  
 燈献 在詔人 福岡屋幸右衛門 中田邑 謙中

四、 同上 奉燈 小田御用講中 天保十四年癸亥建立之 現住 蛭山代  
 右側 奉燈 現住 蛭山代  
 左側 奉燈 撫川 植木藤四郎 (撫川親主、川氏の家臣、子孫は神代に住、吉光一)

五、 神殿の玉垣の内、西側 一対  
 奉献 天保十五辰二月 蛭山代  
 六、 手洗鉢の銘に 正徳三年 九月吉日 奉寄進 施主 備前岡山  
 拝殿の石段に 明治廿六晚秋日 蛭瀬町講中  
 神殿の瑞籬一石柱毎の銘に (左より右廻り)  
 奉寄進 当藩徳田又兵衛 同 石原猪平太 同 万波屋 紅三郎  
 同 田口衛士助 奉寄進 蛭瀬町 同 尾原屋 藤藏 九

同	西村、喜大夫	宮内	長崎屋	年三郎	同	小西屋	栄藏
同	東平野村 辰之藏男	平田村	延右	衛門	同	鈴屋	喜助
同	鳥越 平兵衛	同	繁屋	俊藏	同	鳥羽屋	孝兵衛
同	扇屋 左九郎	撫川町	難波里右衛門	同	同	土佐屋	彌吉
同	大山 俊造	寺町	福智屋 重兵衛	同	同	竹屋	代藏
同	橋本屋 萬三郎	福岡屋 幸右衛門	同	同	同	吉岡屋	庄吉
同	大段瀧海 三八郎	石工	同	同	同	口屋	仙吉
同	口屋 喜三郎	萬屋	同	同	同	葛屋	文治郎
同	物部 筆藏	中野屋	同	同	同	紙屋	三郎
同	佐伯屋 藤治衛門	加納屋	同	同	同	岡島屋	喜十郎
同	栗坂村 大兵	郡屋	同	同	同	平野屋	芳吉
同	吉岡屋 涼五郎	同	同	同	同	同	三郎
同	同	同	同	同	同	同	七郎
同	伊兵衛	同	同	同	同	同	勤治郎

迅速・丁寧

# 岡 寫真館

吉備町本町 電話一三四番

花蓮用・堅糸

# 合名 吉備整經所

庭瀬駅前 電一八番

奉寄進 古話人	太田孫四郎	同	撫川	中田屋 徳藏	同	太田 牧太郎
平笠	吉見屋 善吉	同	西平野	萬屋 文治良	同	渡辺 純
撫川	安井久七	同	吉田孫兵衛	善寄進 備前國津高郡	尾上村佐之木 敬亮	尾上村佐之木 敬亮
長埜	片島屋 萬五郎	同	浅尾英右衛門	同	同	上原 操
宮内	國富善松	同	証屋 惣吉	同	同	谷 甚右衛門
同	は部	同	魚屋 治三郎	同	同	江本 翁介
同	舟越口	同	西田定治郎	同	同	同上村
同	巳之峯 男	同	國富源治郎	同	同	奉寄進 故東平野
同	大河内又七	同	鬼島屋 宗兵衛	同	同	奉寄進 故東平野
同	鈴木政恒	同	山田和一郎	同	同	奉寄進 故東平野
同	福岡屋 志七	同	荒木 恕平	同	同	奉寄進 故東平野
度瀬町	福岡屋 志七	同	荒木 恕平	同	同	奉寄進 故東平野

瑞籬の建立せられた天保十四年は昭和廿六年から逆算して百十八年になる。その同史上にみざる社会制度の変革と時代の奔達は目まぐるしいものがある。寄進者は封建時代の上位にあつた藩士を始め、苗字さえも許されぬいな、農民や町人に至るまであらゆる階級の人達である。その人達は石文に名をとり、めでたきことにこの世を去つて永遠の眠りについでいる。その子孫はどうなつていふことか、他郷に去つていふもの、絶えておぼろげのな、おぼろげの定めなき人生の浮沈は冷む風に漂ふ水萍の如く感慨無量である。(老年の震業を燈籠華表瑞籬は悉く破壊した。華表のみは切取られたり取り除き、燈籠と瑞籬は復旧した。その際瑞籬の支柱はもとの如く配列をなしていない。)

△ 三満宮 荒神宮  
御宮は一五三種四面の木造建流造にレて屋根は本瓦葺である。前庭には

「天満宮荒神宮 玉峯近藤隆義謹書」と書いた板額が掲げられている。裏面には墨書して「慶應三丁卯初冬結」とありこの時代の勧請と思はれる。祭神は云ふまでもなく菅原道真公にレて高さ一五粒の台笠の上には右手に笏を持つ威儀正しい衣冠束帯の姿、本体の高さ九五粒の木造坐像を奉安している。作者不詳なるも享保の頃九州の太宰府の梅樹の古木を用いて謹作したと傳へられる由緒ある神像である。

天神祭は毎年七月廿四日の夜、燈籠を夏まつりが行はれる。当日境内には「奉納 天満大自在天神 度瀬小学校 職員児童一同」梅鉢の紋様を附した「庭瀬小学校 職員児童一同」と白地に黒字で染めた二旛の旛幟がたてられ又境内には児童の書いた「献燈がなぬげられ露店が焚けり張りあされ夜の遅くまで参詣者で賑ふのである。」

信公は書道のすぐれた人であつたので、小学校でも習字の上達を目的として盛んに児童を奨励し何百という献燈が門外の堀端筋までも続く。賑はつたものであるが、戦後教育方針がかわり習字は豫科に属し、履歴書までペン書を採用する求人先もあつた。この献燈も次第に少くなくなり昭和三十四年の祭りから全くあつてしまつた。

謹書した近藤隆義は庭瀬藩校舎の家長である。明治二年の校舎氏侍帳に繰高五十石二人扶持 外縁給人 近藤 彌とあり。邸宅は山陽線西成丸の一踏切を南に越えた右側、九〇八番地の地所にレて今は田圃になつていふ。隆義は号を玉峯といふ。当藩の藩筆家にレて明治十六年十二月十五日、五十三歳で歿してゐるので、この書は三十七歳の時の筆である。墓碑は当寺境内にある。(墓石銘参照)

(おわり) この項未完